

Fundamental Toxicological Sciences

Online ISSN : 2189-115X

ISSN-L : 2189-115X

[資料トップ](#) [巻号一覧](#) [この資料について](#)

12 巻, 3 号

選択された号の論文の6件中1~6を表示しています

Editor's Announcement

The Journal of Toxicological Sciences and *Fundamental Toxicological Sciences* to become open access journals

Toshiyuki Kaji, Akira Naganuma

2025 年12 巻3 号 p. R1

発行日: 2025年

公開日: 2025/05/01

DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.R1>

ジャーナル フリー

抄録を非表示にする

貴殿が当学会の公式学術誌『*The Journal of Toxicological Sciences*』および『*Fundamental Toxicological Sciences*』にご寄稿いただいたことに対し、心より御礼申し上げます。

両誌を国際化し、より広範な読者層に届けるため、オープンアクセス化を決定いたしました。論文は最も自由度の高いクリエイティブ・コモンズ・ライセンスであるCC BY (4.0)のもとで公開されます。この変更により、論文の著作権は著者に帰属し、複製・頒布・展示・保存・改変・商用利用を含む二次利用は、関連学会の許可なく実施可能となります。

新しい投稿規定は、事前に各ジャーナルのウェブサイトに掲載されます。これらの新しい投稿ガイドラインは、2025年6月1日（日本時間）以降に投稿される論文に適用されます。なお、2025年5月31日（日本時間）までに投稿される論文には、従来の投稿規定が適用されますのでご注意ください。

この変更により、皆様の優れた論文が『*毒性科学ジャーナル*』および『*基礎毒性科学*』誌へより多く投稿されることを期待しております。

Toshiyuki Kaji, Ph.D.

Editor-in-Chief

The Journal of Toxicological Sciences

Akira Naganuma, Ph.D.

Editor-in-Chief

Fundamental Toxicological Sciences

[PDF形式でダウンロード \(579K\)](#)

Original Article

Preclinical safety evaluation of Zizyphi spinosi semen simple crushed powder as a potential anti-dementia ingredient

Kunio Nakata, Takami Tomiyama, Michiko Iijima, Takao Sato, Kei Yamana, ...

2025年12巻3号 p. 57-65

発行日: 2025年

公開日: 2025/05/20



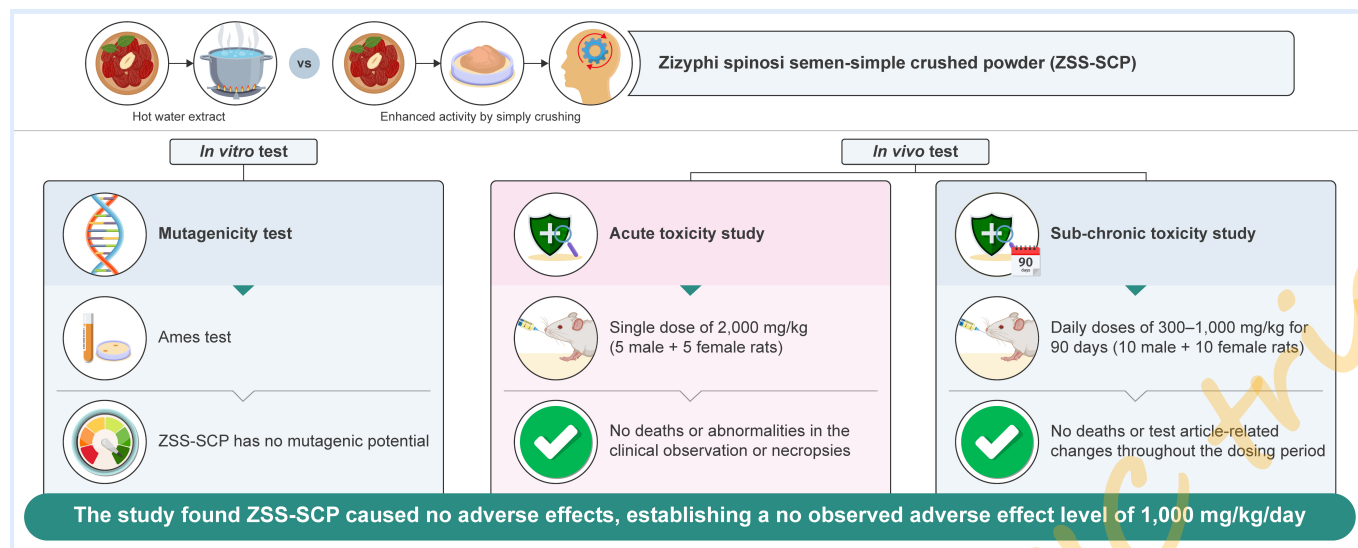
DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.57>

ジャーナル フリー

電子付録

抄録を非表示にする

Zizyphi spinosi semen (ZSS) は、*Zizyphus jujuba* Miller var. *spinosa*の種子であり、不眠症や不安の治療に何世紀にもわたって使用されてきた漢方薬のよく知られた成分である。ZSSは通常、漢方薬として煎じ薬として服用されますが、我々の認知症モデルマウスを用いた先行研究では、ZSSの抗認知症作用は熱水抽出ではなく単純な粉碎によって増強され、有効用量は**3.3 mg/kg**であることが明らかになりました。ZSS単純粉碎粉末 (ZSS-SCP、Ziziphas Powder™) の安全性を評価するため、細菌を用いた*in vitro*変異原性試験 (エイムズ試験)、ラットを用いた急性および90日間の亜慢性経口毒性試験を含む一連の非臨床安全性評価を実施した。急性毒性試験では、ZSS-SCPを2,000 mg/kgの用量で雄5匹・雌5匹に投与した。亜慢性毒性試験では、ZSS-SCPを300 mg/kgおよび1,000 mg/kgの用量で、各用量につき雄10匹・雌10匹に試験した。結果として、ZSS-SCPによる突然変異、動物の死亡、臨床的異常は認められず、無毒性量 (NOAEL) は1,000 mg/kg/日と示された。本知見は、ZSS-SCPが抗認知症食品における安全な成分であることを示唆している。



Fullsize Image

PDF形式でダウンロード (1540K)

Original Article

Placebo-controlled randomized double-blind parallel-group trial of the safety of overdose intake of nicotinamide mononucleotide

Ryota Nakajima, Hidekazu Watanabe, Kunio Nakata, Kei Yamana, Masahiko ...

2025年12月 巻3号 p. 67-77

発行日: 2025年

公開日: 2025/05/28

DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.67>

ジャーナル フリー

電子付録

抄録を非表示にする

帝人株式会社が製造するニコチンアミドアデニンジヌクレオチド (NMN) の安全性は、プラセボ対照無作為化二重盲検並行群間比較法によるヒト過剰摂取試験で評価された。20～64歳の男女からなる日本人健康ボランティア30名を、高用量群、低用量群、プラセボ群に分け、各群のNMN投与量をそれぞれ1,500mg/日、750mg/日、0mg/日に設定し、4週間摂取させた。NMN過剰摂取の安全性を評価するため、摂取開始0週目、2週目、4週目に医療面接を実施し、自覚症状、体重、BMI、血圧、脈拍数、血液検査、生化学検査、尿検査を評価した。脱落者はなかったため、全30名のデータを解析した。研究期間中の全ての診察・検査において問題となる所見や検査値の変化は認められず、1,500 mg/日のNMNを4週間摂取しても安全であることが確認された。血中ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド (NAD⁺) 濃度は有意に上昇し、経口摂取したNMNが全身に分布しNAD⁺へ変換されたことを示唆した。本研究では、NMNはテロメア長に影響を与えなかった。

+

[PDF形式でダウンロード \(1477K\)](#)

Original Article

Human health risk assessments of mercury from the ingestion of edible fishes from Birim River, Ghana

Margaret Boohene, Patrick Adu Poku, Susi Sulistia, Caroline Brown, Emi ...

2025年12月 巻3号 p. 79-94

発行日: 2025年

公開日: 2025/06/13

DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.79>

ジャーナル フリー

抄録を非表示にする

水生環境への水銀排出の主要な発生源の一つは、小規模金採掘（ASGM）である。ビリム川は、魚をタンパク源とする近隣コミュニティに不可欠な生態系サービスを提供している。東アキム自治体の河川から、ニロティカス・オレオクロミス（*Oreochromis niloticus*）、インベリ・ブリキヌス（*Brycinus imber*）、ウラノスコプス・シルベ（*Schilbe uranoscopus*）の計49個体の魚類標本を採集した。魚の鰓（えら）と筋肉中の水銀濃度はMA 3000水銀分析装置を用いて測定した。*S. uranoscopus*の筋肉と鰓は、それぞれ0.870 mg/kg w.w.と0.345 mg/kg w.w.という最高の中央値水銀濃度を示した。対照的に、*O. niloticus*の筋肉と鰓は、それぞれ0.138 mg/kg w.w.と0.066 mg/kg w.w.という最低の中央値水銀濃度を示した。*S. uranoscopus*の筋肉を除き、全サンプルの水銀濃度はWHO基準値を下回った。*B. imber*の鰓・筋肉中の水銀濃度は体重・体長と負の相関を示した一方、*O. niloticus*では体重・体長と正の相関が認められた。*S. uranoscopus*の鰓・筋肉中の水銀濃度と体重の間には有意な相関は観察されなかった。*B. imber*および*S. uranoscopus*の危険係数は1を超過した。これはASGM採掘地域産の*B. imber*および*S. uranoscopus*を摂取する個体が非発癌性リスクに晒されることを意味する。従って、消費者は月間*B. imber*を8食、*S. uranoscopus*を4食、*O. niloticus*を18食摂取することが推奨される。

[PDF形式でダウンロード \(3058K\)](#)

Letter

Polypeptides comprising arginine and lysine regulate the microbial balance in seborrheic dermatitis

Akihiro Michihara, Masato Tange, Hiroshi Matsuoka, Fangfang Wang, Xian ...

2025年12月 巻3号 p. 95-101

発行日: 2025年

公開日: 2025/06/13

DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.95>

ジャーナル フリー

抄録を非表示にする

マラセチア・フルフル (Mf) と黄色ブドウ球菌 (Sa) は脂漏性皮膚炎 (SD) の原因微生物である。特に表皮ブドウ球菌 (Se) はSaの増殖を抑制し、保湿成分を分泌する。したがって、MfとSaの増殖を抑制し、Seの増殖を促進することがSDの緩和に重要である。我々は以前、ヒノキチオールとマルトテトラオース含有オリゴ糖 (MTO) の混合物を異なる濃度で用いると、MfとSaの増殖を抑制するか、Mfの増殖を抑制しつつSeの増殖を促進することを報告した。本研究では、前述の3微生物に対し、抗菌・抗真菌作用が報告されているフェルラ酸、コハク酸、ポリリジン、ペプチスキシン (PK: アルギニン・リジンポリペプチド) を用いて、SD関連頭皮微生物叢の改善効果を評価し、有効濃度を決定することを目的とした。さらに、以前に報告されている Mf の増殖促進剤である MTO と、本研究で特定された有効薬剤との併用効果を評価した。特に、0.08% PK は、Mf の増殖を著しく抑制し、Sa の増殖を著しく促進する一方で、Se の増殖を著しく促進する唯一の試薬であった。さらに、0.80% PK および 1.40% MTO の組み合わせは、0.08% または 0.80% PK 単独と比較して、Se の増殖を著しく促進した。全体として、我々の結果は、PKが単独またはMTOとの併用により、SDの予防および治療に有効である可能性を示唆している。

[PDF形式でダウンロード \(1624K\)](#)

Erratum

Erratum: Effects of food restriction for 3 or 7 days on toxicity-related parameters in rats

Naohisa Umeya, Kumiyo Okada, Naoe Nishimura, Izumi Matsumoto, Toru Usu ...

2025年12巻3号 p. E1

発行日: 2025年

公開日: 2025/06/03

DOI <https://doi.org/10.2131/fts.12.E1>



ジャーナル フリー

抄録を非表示にする

Fundamental Toxicological Sciences, 11 (2), 57-67, 2024.

[Page 58, line 35-37]

Error

The rats were housed at a constant temperature (20–26°C) and humidity (40%–70%) under a 12 hr/12 hr light/dark cycle.

Correction

The rats were fed CRF-1 (Oriental Yeast Co., Ltd., Tokyo, Japan) and housed at a constant temperature (20–26°C) and humidity (40%–70%) under a 12 hr/12 hr light/dark cycle.

[PDF形式でダウンロード \(498K\)](#)

編集・発行 一般社団法人日本毒性学会
制作・登載者 株式会社 仙台共同印刷